九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中国雑誌「女声」の文芸欄をめぐって : 宮沢賢治の「注文の多い料理店」を中心に

賴, 怡真
九州大学大学院比較社会文化学府 : 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/27416

出版情報：九大日文. 20, pp.34-50, 2012-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

中国雑誌「女声」の文芸欄をめぐって

――宮沢賢治の「注文の多い料理店」を中心に――

LAI Yichen
賴　怡　真

一、序論

賢治の「雨ニモマケズ」の「一日二玄米四合ト」の記述を、戦前、北京大学教授銭稲孫が自身で編纂した『日本詩歌選』（昭和一六年）に「北国農謡」の題で漢訳し、満州地域の文化機関がそれから事務局訳のチラシを配布し糧穀の供出に役立てた[1]。銭のこの翻訳は、中国においてだけではなく、外国語訳としては初のものともなった。そして昭和一七年、季春明訳『風大哥』（風の又三郎）が芸文書房から刊行された。次の中国における宮沢賢治の翻訳作品は昭和三二年に、洪忻訳で中国児童出版社によって刊行された『小木偶拉大提琴』（セロ弾きのゴーシュ）である。以降、文革の影響で、宮沢賢治を含め、日本文学の翻訳が途切れ、再び宮沢賢治の翻訳作品が中国に現れたのは、ずっと後の平成六年のこととなる[2]。田村俊子が主宰していた雑誌「女声」（昭和一八年一二月号）に緑妮訳の「注文の多い料理店」が掲載されていたことはほぼ世に知られていなかった。

雑誌「女声」は、「国際新聞欄」「児童欄」「婦女の職業、衛生、美容欄」「娯楽欄」「文芸欄」「劇評や映画鑑賞欄」で構成されていた。全三八期にわたり、文芸作品としては七四作があった。第二巻第七期から「文芸欄」には、日本の文学作品が次第に紹介され始める。その中には、宮沢賢治の童話「注文の多い料理店」（緑妮訳、第二巻第八期）や、豊島与志雄の童話計四編、「銀の笛と金の毛皮」（緑妮訳、第三巻第一～三期）、「うどんと石」（緑妮訳、第三巻第四期）、「太一の靴は世界一」（緑妮訳、第三巻第五期）、「象のワンヤン」（緑妮訳、第三巻第八、九、一一、一二期）が翻訳され掲載されている。そのほかに、武者小路実篤の小説「愛と死」（荻崖訳、第三巻第三～八期）や、火野葦平の怪奇小説「怪談宋公館」（荻崖訳、第二巻第一〇～一二期）がある。

田村俊子の年譜[3]によると、昭和一七年二月、田村俊子は北京から単身南京へ赴き、平等俊成の紹介状を持って初めて草野心平の前に現れたという。当時の草野心平は、中国の汪兆銘政権の宣伝部専門委員として招かれ、南京に滞在していた。俊子は、草野心平から上海居住の実業家名取洋之助を紹介され、南京日本大使館報道部の松平忠久にひきあわされ、俊子は洋之助との間に、中国女性を読者対象とした華字婦人雑誌を発行する計画をまとめあげた。上海で太平出版公司と太平書局を経営していた名取洋之助たちの協力を得た田村俊子は、太平書局の中に編集室を設け、南京日本大使館報道部より用紙配当の保障を得て、上海日本総領事館嘱託となるとともに、昭和一七年五月一五日、中国名左俊芝という名で、月刊誌「女声」（上海図書館

蔵）を創刊した。毎月一冊、計四巻、各巻一二期で全部三八期の雑誌である。日本の敗戦及び俊子の死によって、昭和二〇年七月一五日に廃刊となった。俊子は「左俊芝」の中国名を使って毎号巻頭文を書いたほか、好きな演劇についての批評文を載せたりしていた。編集、取材、資材の確保、売りさばき、資金集め、あらゆる雑務の一切合切が俊子の肩におそいかかっていたという[4]。編集委員には、中国共産党から送り込まれた左翼女性詩人、関露（クアンロー）や二、三人の中国人の若い女性たちがいた。第一巻から第三巻までの編集人は左俊芝であるが、俊子が死んだ後の第四巻では、前記の関露（クアンロー）が編集人となる[5]。

田村俊子は、「自分が語りたい、そして語れる言葉は何か」[6]というメッセージを中国で虐げられている女性読者のために送る媒体として、雑誌「女声」を位置付け、自らを中国の女性解放のための一つの陣地として位置付けた。しかし、中国語の不自由な俊子に代わって、編集のほとんどを行ったのは、日本と汪精衛傀儡政府の情報を集める目的で共産党から送られてきたスパイの関露であった。日本領事館からの資金援助を受けていた「女声」には、第一巻第三期（昭一七・七）からは奥付に「工部局警務処登記証号」が、第三巻第二期（昭一九・六）からは「国民政府宣伝部登記証」が付されている[7]。日本帝国主義のプロパガンダ雑誌だった「女声」は、時局に迎合する記事を載せるのが普通だっただろうが、関露の関与によって、ひそかに抗日運動のための地下舞台ともなった。中国語で書かれた作品は、ほぼ関露が選定したと言われているが[8]、「文芸欄」における日本作家の作品の選定が、どういう基準で行われ、また田村俊子がどれほど関与したのかが、とても興味深い問題となっている。日本作家の面々を見てみると、時局に好都合だった宮沢賢治や、現在となってはあまり名が知られていない豊島与志雄、戦時中にベストセラーとなった火野葦平、白樺派の代表的な作家の武者小路実篤など、おのおの無関係に見えるような顔触れである。外国の雑誌の編集なので、もちろん、中国語の問題にも及ぶだろうが、中国語が苦手だった俊子が、どのように関与していたかは知ることが出来ない。また、掲載されている日本作家の作品は、すべて翻訳されたもので、翻訳者に関する資料は現段階では、ほぼ皆無に近い状態である。それでも少ない手がかりで、掲載作品の時代背景や、作家自身と田村俊子の接点についての検討作業を行い、田村俊子の「女声」での仕事の全貌を少しずつ浮き彫りにしたい。そして、本稿のもう一つ大きな目的は、戦時中に時局に利用された宮沢賢治の作品が中国雑誌「女声」に掲載されたことの意味を問うことである。賢治文学が中国においてどのように受容されたかについて、また比較文学における受容史の研究に対しても、新たな視点を提供してくれることを期待する。次章から作家別に一人ずつ検討したい。まず、豊島与志雄と田村俊子との接点について検証し、次に武者小路実篤の中国における受容、そして日本国内だけではなく、中国の文壇でもいち早く注目された戦時中の新星、火野葦平について論じていきたい。最後に、宮沢賢治の作品掲載問題について、「女声」の創刊を手助けした草野心平との接点から論を述べて

いきたいと思う。

二、豊島与志雄と田村俊子との接点

豊島与志雄は鈴木三重吉の「赤い鳥」運動に刺激され、児童文学の世界に足を踏み入れた作家の一人である[9]。彼の小説は一般大衆向けではなかったが、一〇〇編も超えた童話作品は当時の人々に親しまれ、愛されてきた。また、外国小説の名訳も名高い。童心主義に傾き、物語性を無視しがちだった同時代児童文学作家とは一線を画した豊島の作品はいつも現実の子どもが意識されていると関口安義[10]が指摘している。また、関口は豊島の小説を二期に分けて考えることができるとし[11]、前期はそのほとんどが年幼者向きの短編童話であるのに対し、後期は総じて対象年齢が高く、比較的長い物語もあるのだという。「天狗笑」[12]や「キンショキショキ」のような、日本土着の民話的発想からなるものもあるが、「女声」（第三巻第一～三期）に連載されていた「銀の笛と金の毛皮」（初出「幼年倶楽部」（昭七・一～六）といった昭和七年以降に書かれたものは後期のものとされる。「銀の笛と金の毛皮」をはじめ、「エミリアンの旅」（初出「少年倶楽部」昭七・七～一二）など昭和七年以降の後期作品は、「この頃、母を失いし子供達のため、ほとんど童話にのみ筆をとる」という豊島の娘の夫である斉藤正直[13]の証言のように、「銀の笛と金の毛皮」も羊飼いの孤児エスモスを主人公とする物語である。この時期に書き下ろされた豊島の童話には、共通する「賢い鋭い少年の眼」という特徴が窺われ、「知恵と勇気に満ち、私心がなく、のびのびと行動できる少年」が描かれていると関口は指摘しているが、「女声」（第三巻第八、九、一一、一二期）[14]に連載された「象のワンヤン」（初出「せうがく三年生」昭一五・八～一六・三）のワンヤンもこうした主人公の一人である。

「女声」の文芸欄では、昭和一九年五月をはじめ、六月、七月の三ヶ月連続で豊島与志雄の「銀の笛と金の毛皮」が連載され、続いて八月には「うどんと石」、九月には「太一の靴は世界一」、同年末の一二月から翌年の一月、三月、四月には「象のワンヤン」が掲載されている。このように、豊島与志雄の童話作品は、「女声」の文芸欄に頻繁に登場することが窺われる。実は豊島与志雄と中国との間には深いかかわりがあった。彼は四度に渡って、中国を訪れることがあり、その初回の昭和一五年三月上旬から四月上旬にかけては、谷川徹三と加藤武雄が同伴したのであった[15]。二回目は同年の九月、内山嘉吉と同行した青島・済南・北京への旅、三回目は昭和一八年一〇月の阿部知二との上海・南京旅行、四回目は翌一九年一一月、南京で行われる第三回大東亜文学者大会への出席のための旅であった。豊島の中国訪問は昭和一五年から始まり、昭和一九年までの短い間に、実に足しげく訪ねていたと言えよう。

ここで注目したいのは、田村俊子と豊島与志雄との関係である。二人の直接の関係についての叙述は今までの先行論文ではほとんど扱われていないが、上海で「女声」を主宰していた頃の俊子には、中国を訪問する内地の作家たちとの交流が依然と

してあった。中国文化協会の武田泰淳や堀田善衛をはじめ、上海に渡っていた阿部知二、石上玄一郎などとの交流もあったという[16]。俊子と頻繁な交流があった阿部知二は、豊島の三回目の中国訪問で同伴していた。また、豊島の四回目の中国訪問の主な目的である大東亜文学者大会へは、俊子も「内地から訪れる懐かしい文学者たちに逢うためいそいそと出むいてった」[17]とあるように、会場へ赴いていた。のちにこの日における文人たちとの交流について、阿部知二はこう述べていた。「一日、もはや冷たい風の吹く玄武湖上に、枯蓮を分けながら舟あそびしたことがあつた。一行は二隻の舟にわかれて乗つたが、彼女とぼくの舟には、たしか温厚の仏文学者T氏、中国文学者のO氏、劇作家H氏などが乗つていたかと記憶する」[18]。ここでいう温厚の「仏文学者T氏」とは、東京帝国大学法文学部講師や法政大学法文学学科主任など務めており、フランス・ロマン主義文学の名著「レ・ミゼラブル」の翻訳で有名だった豊島与志雄のことであろう。また、豊島と親交のある中島健蔵は、草野心平と前衛芸術運動「火の会」を結成した同人であり、中島と心平との繋がりの延長線上には、心平の豊島との接点があったのかもしれない。

右をまとめてみると、昭和一五年～一九年の間に四回に渡って中国を訪問した豊島与志雄が、三回目の訪問で出席した南京で行われた第三回大東亜文学者大会に田村俊子も出むいていたということになる。その後の文人たちの交流については、阿部知二の「花影 田舎への手紙」に記されている。阿部知二だけではなく、「女声」の創刊を手助けしていた草野心平との接点もあった中島健蔵も、豊島の友人の一人であった。昭和一九年の五月から翌昭和二〇年の四月までほぼ毎月のように、俊子主催の「女声」に豊島の童話が掲載されていたのは、偶然ではないと考えられる。

三、五四運動後の武者小路実篤

「女声」の文芸欄（第三巻第三～八期）では、昭和一九年七月～一二月のあいだに、武者小路実篤の小説「愛と死」（新潮社、昭和二七年九月、初出昭和一四年七月「日本評論」）が連載されていた。「愛と死」が発表された日にちと、「女声」での掲載期間はそれほど離れていない。中国ではほぼ知られていなかった豊島与志雄と違い、武者小路実篤は当時の中国での知名度が高かった。特に中国文壇では大きな影響力をもっている日本作家の一人とされ、白樺派の代表人物の一人である実篤は中国翻訳史上においても早い時期に紹介されるほどの著名作家であった。中国における実篤の知名度の背後には、大正八（一九一九）年に起きた五四運動との深い関係があった。

王向遠の『二十世紀中国的日本翻訳文学史』[19]によると、白樺派についての説明はこうである。「白樺派の登場は、日本近代文学史上で最も早く起きた文芸思潮でもないし、ましてや最も影響力の持つものでもない（同書では写実主義、浪漫主義、自然主義を取り上げて説明する――論者注）」という。しかし中国で五四運

動が行われた時、いち早く翻訳され、そして多大な影響力のあった日本文芸思潮としては、白樺派及びその人文主義文学が挙げられ、その影響力は五四運動の後も続いていた。その中では、とくに武者小路実篤が最も高い支持を得ていた。

ここで簡単に五四運動の概観に触れておこう。大正八（一九一九）年五月四日の北京の学生デモにはじまり、上海の「三罷」闘争においてピークに達し、六月二八日の講和条約調印拒否にいたったこの過程は「五四運動」と呼ばれる。[20] 狭間直樹[21]が、前年に起きたロシア革命やほぼ同時期の朝鮮での三一運動の後に起きたこの運動は、中国における民主主義革命の新しい段階のもので、いままでの運動とは質の違ったものであると指摘している。新しい要素としては、狭間はまず「徹底的な反帝運動」であり、それが帝国主義列強の世界再分割策への反対運動であったことを指摘している。その次に指摘されている第二の新しい要素としては、五四運動に先行して新文化運動と呼ばれる思想界の刷新運動が挙げられる。これらの運動は一九一〇年代に起こった啓蒙運動であり、その運動のオピニオンリーダーとして、陳独秀・李大釗・呉虞・胡適・魯迅・周作人などが挙げられる。彼等は「新青年」や「毎週評論」といった雑誌を創刊し、それによって新思想を吹き込んだ。自由が軍閥専制のもとで抑圧され、思考が封建倫理の枠内で抑圧されていた当時において、自覚的な闘争の準備を整えた。このように、反帝国主義・反封建の五四運動では、国家の尊厳と社会からの解放が訴えられ、その最も重要なテーマは「腐敗した家庭の束縛」「狭隘な愛国心の拘束」[22]からの、つまり《人》からの解放であった。それは白樺派の作家たちの描いた小説の中心テーマと重なり、時代の風潮とも言えようか、中国において白樺派の文学作品をすんなりと受け入れさせる環境が整えられていた。白樺派が中国で引き起こしたブームは「未熟な部分もあるが、健康的かつ前向きで、やや現実離れのものもあるが、建設的で人道的な理想主義に富んだ白樺派の作風は当時の中国の知識層が渇望していたものだった」（王向遠、前掲『二十世紀中国的日本翻訳文学史』）との指摘でも窺われる。特に「互助の社会」や「一人一人が愛し合う社会」[23]といった白樺派が目指していた未来像は、倫理的・人道主義的傾向の強かった五四運動の性格と合っていた。

このようなことを背景にして、白樺派の中で最も早く中国語に翻訳され、中国の人々に高い支持を得ていたのは武者小路実篤であった。その理由としては、実篤の作風の受け入れやすさのほかに、五四運動と同時に起きた新文化運動の担い手「新青年」の周作人と魯迅の存在が欠かせなかった。周作人は雑誌「新青年」（大正七年）で、実篤の戯曲「一個青年的夢」（「或る青年の夢」、初出「白樺」大正五年四月～一一月）を反戦派の代表的な作品として紹介した。それを読んで非常に感銘を受けた魯迅は、大正七年二月から「民国公報」で「或る青年の夢」を翻訳し連載を始めた。[24] 自分の作品が中国で翻訳され掲載されたことを知った実篤は、嬉しく思って、大正八年二月に「与支那未知的友人」（「支那の未知の友に与える」）という一文を寄せた。同文章も大正一一年商務印書館によって出版された『或る青年の夢』（魯

迅訳）の単行本に掲載されていた。実篤文学のブームは、五四運動以降も続き、五四運動以降の二〇、三〇年代となると、実篤文学の受容は第二段階に入った[25]。彼の作品は以前よりさらに全体的に紹介されるようになり、小説のみならず、評論や戯曲なども盛んに翻訳されるようになった。昭和二（一九二七）年には孫百剛訳・上海光華書局刊行の『新村』（『新しき村』）が、昭和四（一九二九）年には章克標訳・上海金屋書局刊行の『愛欲』が発表されており、そして昭和六（一九三一）年においては、王古魯・徐祖正訳・南京書局出版の戯曲集『四人及其他』（『四人とその他』）[26]などが発表されている。

このように、大正八（一九一九）年に中国で起きた五四運動、およびこの運動がもたらした新文化運動を契機に、白樺派の中心人物である武者小路実篤の作品が広く中国に紹介され、浸透し、その影響力は五四運動以降の三〇年代にまでも及んでいたことがわかる。当時の中国の文人たちにとって、実篤の作品は受け入れやすかったのであろう。「女声」で昭和一九年七月～一一月まで、実篤の「愛と死」が掲載されたのも、実篤が中国の知識層の間で知名度があったからかもしれない。

四、火野葦平「怪談宋公館」

「女声」（第二巻第一〇～一二期、昭一九年二～四月）掲載の火野葦平の「怪談宋公館」は昭和一四年、中国の邦字新聞「南支日報」に一〇月一五日から同月二九日まで連載された作品である。

火野葦平といえば、「麦と兵隊」「土と兵隊」「花と兵隊」の「兵隊三部作」で従軍記者として戦時中から戦後にかけて名を轟かせ、「戦争文学の最も輝かしい一つの星」[27]と評価され、戦時中の日本において最も注目されていた作家と言えよう。火野は昭和一二年九月一〇日、十八師の柳川兵団に召集され、翌々月、杭州湾に敵前上陸した。小説「糞尿譚」が芥川賞を受賞したことをきっかけに、中支派遣軍報道部勤務を命ぜられ、徐州会戦に従軍した。その後、「麦と兵隊」を皮切りに、次々と戦地ルポルタージュを発表した。「兵隊三部作」の発表後に、前々から聞いていた巷で噂のお化け屋敷の話「幽霊と兵隊」を書いてみたいと思っていたことが著者の後日談で明らかにされている[28]。それが小説化されたのが小説「怪談宋公館」であった。宋公館は広東入城直後、火野と兵隊たちが宿舎としていた豪壮な屋敷で、「広東陥落までは宋子文の妾宅であって、豪奢な生活が営まれてゐた」[29]のである。日本の怪談とは一味違う支那の幽霊兵隊の活躍は、ＮＨＫで連続ドラマ[30]として放送されたほどの大反響だった[31]。

火野葦平の「兵隊三部作」について、発表当時「麦」は七〇萬部、「土」は四〇萬部、「花」は三〇萬部を刷つた。戦時中から戦後にかけてこれほど宣伝された日本の作品を私はまだ見ない」と井伏鱒二[32]が指摘しているように、火野はたちまち国民的作家となった。火野の活躍はすぐに中国の文壇にも注目され、昭和一三年一二月、反日傾向の強い上海雑誌社によって、呉哲非訳の『麦与士兵』（麦と兵隊）として出版された[33]。それは

日本で単行本として出版されてわずか四ヶ月後のことであった[34]。また、昭和一四年三月、新京「偽」満州国出版部刊行で、雪笠訳の『麦田裏的兵隊』（麦と兵隊）が出版され、また昭和一四年一月に、北京の東方書店によって金谷訳の『土与士兵』（土と兵隊）が出版された。その中で『麦と兵隊』は当時の文壇及び知識人の間に大きな反響を呼んでいた。もちろん、抗日傾向の強い出版社から火野の作品が出版されたことは、敵偽（敵側）の出版社から出版されたこととは、全く違う意味合いをしていると王向遠[35]が指摘しているが、当時の火野葦平の作品は日本国内においても、中国においてもほぼ時差なく受け入れられていたことが窺われる。

五、宮沢賢治と「女声」

宮沢賢治の「注文の多い料理店」が田村俊子主宰の中国雑誌「女声」に掲載されるにあたって、二つ気になる点がある。一つは、「女声」創刊の協力者の一人である草野心平の介入があったのではないかということ、もう一つは、宮沢賢治文学の戦時中の受容問題も関わっているのではないのかということである。この二つを手掛にして、検証していきたい。

草野心平の宮沢賢治文学の「発見」

草野心平は大正九年四月に慶応義塾普通部に編入したが、半年ほどで退学、大正一〇年一月に中国広州に渡り、広東省広州の広東嶺南大学（現・中山大学）のゼネラル・アーツ・サブフレッシュマンに入学する[36]。大正一二年の夏休みには、徴兵検査を受けるため七月に帰国し、検査では第二乙種だったので兵役は免れたが、父との確執は続き、生家にも立ち寄らなかった。そこで帰路の旅費を稼ぐ為に柴田書店でアルバイトをしながら、自分の詩と兄の詩・短歌をあわせた『廃園の喇叭』の謄写版を印刷した[37]。印刷を手伝ってくれた三人のうちの一人は、赤津三郎の弟佐々木（旧姓赤津）周雄だった。大正一三年八月、当時日比谷図書館に勤務していた赤津は、詩を書き始めた先輩、心平のために、心平の大学の寄宿舎に宮沢賢治の詩集『春と修羅』の一冊を送った。それは賢治が同年（大正一三年）一一月に東京光原社によって自費出版したばかりのものだった。心平は賢治の詩を読んで瞠目したという[38]。賢治の詩集を読んだ心平はすぐ賢治に手紙を書いた。手紙の骨子は「銅鑼」同人勧誘の要望だった。大正一四年、心平は黄瀛、原理充雄・富田彰を同人に誘い、大学の友人の劉燧元を加えた五名により、同人詩誌「銅鑼」を創刊した。心平は嶺南学校在学中、中国人学生との親交があった。その中には後に南京政府の広報部長になり心平を招聘する林柏生がいた。広州には日本のマスコミの支社も多く、心平は電通の支局でアルバイトをし、一一年六月には北伐途上の孫文とのインタビューに助手として参加した。戦時中、汪兆銘の傀儡政権が成立すると、宣伝部の臨時部長である林柏生の要請を受け、南京に赴き、宣伝部顧問を勤めた。心平が日

本に引上げたのは昭和二一年三月のことである。[39] 前記のように、心平は宣伝部顧問を務めていた時に、当時の南京で雑誌をやりたいという田村俊子と知り合い、俊子の雑誌「女声」の創刊の手助けをした。雑誌「女声」の文芸欄に宮沢賢治の「注文の多い料理店」（第二巻第八期、昭一八・一二）が掲載されているのは、賢治文学の流布に多いに貢献し、また「女声」の創刊と大きな関わりがあった心平の奔走が見え隠れしているのではないかと考えられる。

ここで、浮かび上がった問題としては、何故「女声」に掲載された賢治の作品が、「注文の多い料理店」であったかということである。現在では、賢治の「注文の多い料理店」は、同名童話集『注文の多い料理店』（東京光原社、大正一三年一一月）に収録されている作品の一つとして広く知られている。しかし、昭和一八年、賢治の死後十年に当たる頃には、他の作品と比べて知名度の低い作品であった。賢治は生前、詩集「春と修羅」、童話集『注文の多い料理店』を自費出版したが、僅か一〇〇〇冊しか売れなかった、ほぼ無名に近い状態の新人であった。文壇で賢治を認めたのは佐藤惣之助と辻潤と、当時まだ嶺南大学在学中で詩を書き始めたばかりの草野心平くらいだった。[40] 賢治の死後に、草野心平の奔走及び文圃堂からの賢治全集出版によって、宮沢賢治の名が徐々に知られるようになったが、どうしても詩編「雨ニモマケズ」に見られる「デクノボウ」のような聖人のイメージが先行してしまった。したがって、初期に取り上げられた賢治の作品は、作者の聖人のイメージを植え付けようという意図が見える「グスコーブドリの伝記」や童話「気のいい火山弾」（教材化されたのは「ぺこ石物語」）のような自己犠牲がテーマとなった作品や自己顕示欲のない主人公が描かれている作品が主となっていたことがわかる。雑誌「女性」に「注文の多い料理店」が掲載されていた時の賢治文学の時代背景を明らかにするためには、まず、賢治文学の受容及びその流布について詳しく検証する必要がある。

戦前、戦時中の日本及び中国での宮沢賢治の受容

生前の賢治は、「農事の実際的研究家として知られてゐる」（「岩手日報」昭和六年七月九日夕刊）とあるように、詩人や作家という肩書よりも、農事での貢献のほうが知られている。文壇での賢治受容は、賢治の詩を読んで瞠目した草野心平の功績だといえよう。賢治は昭和八年九月二一日に死去し、翌日の「岩手日報」夕刊にその訃報が掲載され、また森佐一（森惣一・森荘巳池）[41] が記者をつとめていた「岩手日報」夕刊の学芸面では、「宮沢賢治追悼号」が二回（昭和八年九月二八日、一〇月五日）組まれ、紙面を大きく使って遺稿や追悼文等が掲載された。同時期に亡くなった佐々木喜善の追悼号が一回のみであったのと比べ、二週連続での賢治の追悼号の掲載が如何に目立つかがわかる。その後、花巻や東京で賢治の追悼会が行われ、昭和九年一〇月に文圃堂によって全集第一回配本、翌年の七月、九月の第二回、第三回配本によって全三冊が出版されている。わずか二年とい

う短い歳月にハイピッチで賢治の全集が世に送られたことは、前述した詩人の草野心平の功績及び、全集の出版に際しての、金銭的バックグランドであった賢治の父政次郎や、賢治の膨大な原稿を持って各出版社に奔走した弟の清六の功績が挙げられるだろう。

以上のように、周りの人びとの助けもあって、賢治の作家としての道程は、賢治の死後から始まったと言うことが出来るだろう。その動きは戦争が始まってからも少しも止まなかった。昭和一三年児童文学の浄化措置として内務省警保局図書科から「児童読物改善ニ関スル指示要綱」がだされ、事実上、厳しい弾圧を意味する出版統制が強まる中、宮沢賢治の著書はかえって、保護されているかのように、次々と出版された[42]。

昭和一四（一九三九）年、没後七年

三月七日、『宮沢賢治名作選』（松田甚次郎編、羽田書店＊同年六月九日に文部書推薦図書となる）

一二月二〇日、『風の又三郎』（坪田譲治編、羽田書店＊翌年三月一五、文部省推薦図書となる）

昭和一六（一九四一）年、没後九年

四月二〇日、『グスコーブドリの伝記』（羽田書店）

一二月二〇日、『銀河鉄道の夜』（新潮社）

昭和一七（一九四二）年、没後一〇年

一月一五日、『どんぐりと山猫』（中央公論社）

九月五日、『宮沢賢治童話集』（藤原嘉藤編、日本青年館）

九月八日、『宮沢賢治』（佐藤隆房著、富山房）

昭和一八（一九四三）年、没後一一年

一月三〇日、『宮沢賢治』（森荘已池著、小学館）

九月二八日、『フランドン農学校の豚』（藤原嘉藤編、東京八雲書店）

米村みゆきによれば、賢治童話の推進の背後には、賢治の同郷で、内務省に勤務していた佐伯郁郎という存在があったという[43]。佐伯は児童文学運動の推進者の一人で、また「宮沢賢治友の会」[44]の常任幹事もしていた。昭和一八年一月、少国民文化協会[45]の機関誌「少国民文化」での座談会において、賢治は「此の世界では、あの人なんか実に大きな存在」「宮沢賢治が今生きてゐて童話を書いたならば、時局的のもので非常に良いものを書きはしないかと思ひます」と高く評価されている。昭和一七年三月に、「雨ニモマケズ」は、大政翼賛会文化部編纂「時歌翼賛第二輯」に掲載され、四月に大政翼賛会選定、詩朗読レコードとして中村伸郎氏の朗読が吹き込まれ、日本ビクター蓄音器株式会社（現・日本ビクター株式会社）より発行された。時局としては都合の良い内容の宮沢賢治文学は戦時下での発禁、弾圧によって色褪せることはなく、かえって世間に広まったと言えよう。今でも賢治を語る時に、必ずと言ってもいいほど、「雨ニモマケズ」の詩が取り上げられる。戦前から「聖人」「聖農」化された宮沢賢治の評価に対して、戦後になって徐々に批判的な声が出始めた。それにもかかわらず、「雨ニモマケ

ズ」で描かれているような「デクノボウ精神」が満ち溢れている聖人的なイメージの先行が、今でも続いていると言ってもよい。

そして、宮沢賢治の名が日本全国に知られるようになったのは、「雨ニモマケズ」の流布のほかに、もう一つ大きな要素として、新しいメディアの台頭、映画の普及が挙げられる。「風の又三郎」の映画化については、米村みゆきの「Making of 風の又三郎」[46]で詳細に語られている。映画『風の又三郎』（日活）が公開されたのは、昭和一五年のことである。太平洋戦争直前の制作にもかかわらず「童心の世界」が描かれたこの作品が始めて世に出されたのは、昭和九年刊行の文圃堂書店『宮沢賢治全集』第三巻中においてであり、昭和一三年に、劇団東童によって、演劇として上演され、その演劇の成功が、昭和一五年の日活による映画化へと繋がるのである。昭和一五年一〇月一〇日に全国各地の映画館で公開され、翌日の一〇月一一日に文部省推薦映画となり、文部大臣賞も受賞した。日活映画『風の又三郎』では、宮沢賢治の原作には見られない「学校」の要素[47]が盛り込まれるように制作され、それは、演劇台本から映画台本へ書き換えられた時の文部省の嗜好、あるいはその要請に即したものではないかと米村は指摘している。

上映地域は北海道から九州、そして海を渡って、京城、満州、さらには現在は北方領土になっている樺太にまで及んだ。日活映画『風の又三郎』の上映表を見ると、満州での上映期間は、新富座で昭和一五年一一月二三日～二九日（参照紙名「満州日日新聞」）である。また、「大陸日報」（上海）では、昭和一五年一〇月一八日から同二六日まで「映画物語風の又三郎」という連載記事（全八回）が掲載されている。また、戦時中、宮沢賢治の文学を中国で広めようとする動きがあった。賢治の死後に、賢治の短歌を世に広めるために、十字屋版『宮沢賢治全集』の編纂を行った森惣一は、昭和一九年五月に満州にわたって、そこでも宮沢賢治選集を企画していたが、それは実現しないままであった[48]。序論でも述べたように、宮沢賢治の初めての外国語訳として挙げられるのは、昭和一六（賢治没後九）年四月三〇日に、北京近代図書館発行『日本詩歌選』に銭稲孫漢訳で収録された「雨ニモマケズ」である。翌年の昭和一七年、新京市芸文書房より、季春明訳の「風の又三郎」の漢訳「風大哥」が発行されていた。賢治の「風の又三郎」は、季氏による翻訳以前に、満州ではすでに昭和一五年における「風の又三郎」の映画化によって世に知られていた作品であった。また、昭和一六年五月一五日、満州建国大学の白系露人セリヨデキン氏が語学大会において、「雨ニモマケズ」を朗読している[49]。賢治の「注文の多い料理店」が中国雑誌「女声」に掲載されたのが昭和一八年一二月であることを踏まえると、昭和一五年に、映画「風の又三郎」が公開されて以来、ほぼ毎年のように、宮沢賢治の作品が翻訳され、徐々に中国に浸透していったことがわかる。その後、文化大革命の一一年間は、宮沢賢治の作品を含めた日本文学の翻訳研究などがすべて発禁となる[50]。

このように、賢治文学は日本においても、中国においてもほ

ぼ同時に、しかも同じ経路（詩編「雨ニモマケズ」及び、映画「風の又三郎」の公開）で、普及していったことがわかる。雑誌「女声」（第二巻第八期、昭和一八年一二月）に掲載された賢治の「注文の多い料理店」は、賢治が生前に自費出版した唯一の童話集『注文の多い料理店』の同名小説であるにもかかわらず、賢治文学の普及の初期の段階では、取り上げられることはほぼなかった。また、前述した昭和一四年から一八年にかけて次々と出版された賢治童話の著書ナンバーを見ても、「注文の多い料理店」という作品がスポットライトを当てられることがなかったということがわかる。それでは、「注文の多い料理店」が世に知られるようになったのは、いつのことからだろうか。賢治作品の普及に貢献したこととしては、前述したように、賢治死後の草野心平の奔走や全集の出版などといった理由が挙げられるほか、教科書の選定作品とされたことも大きな理由と言える。牛山恵の調査によると、昭和二一年一一月に暫定教科書として使用された『初等科国語』（文部省）に賢治の「どんぐりと山猫」が収録されていたという[51]。それをはじめとして、賢治の作品が多数、教材として使用されるようになり、昭和二〇年代に「どんぐりと山猫」と「ぺこ石物語」（童話「気のいい火山弾」の教材化）が、三〇年代に「気のいい火山弾」「どんぐりと山猫」「風の又三郎」「よだかの星」「オツベルと象」「祭りの版」「虔十公園林」「セロ弾きのゴーシュ」が、四〇年代に「虔十公園林」「セロ弾きのゴーシュ」「祭りの晩」「気のいい火山弾」「風の又三郎」「やまなし」「グスコーブドリの伝記」七作が収録されていた。そして三〇年代から、賢治童話が教科書に掲載され、「宮沢賢治」の作家伝および賢治文学の精神が語られている「雨ニモマケズ」詩編の暗誦も行われるようになり、聖人としての賢治像が意図的に形成されていった。ほかの作品と違って、「注文の多い料理店」の教材化が行われたのは五〇・六〇年代のこととなったのである。このように、賢治の「注文の多い料理店」は同名童話集『注文の多い料理店』に収録されていたにもかかわらず、作品自身の普及はかなり後のこととなる。

「注文の多い料理店」が「女声」に掲載されたことの意味

『注文の多い料理店』刊行の際に、賢治自身が考案した広告用ちらしには、童話集の目次及び作品に対する紹介文が載せられていた。下記は「注文の多い料理店」についての紹介文である。

> 二人の青年神（ママ）（「紳」の誤植）士が猟に出て路を迷ひ「注文の多い料理店」に入りその途方もない経営者から却つて注文されてゐたはなし。糧に乏しい村のこどもらが都会文明と放恣な階級とに対する止むに止まれない反感です。（傍点は論者によるものである）[52]

この最後の一文からわかるように、「注文の多い料理店」の初期評価としては、主に「都会ＶＳ田舎」、「文明（紳士側）Ｖ

S自然（山猫側）」の二項対立、西洋文明への作者の痛烈な批判が込められているという評価があった。こういった単純な読みに再考を促すような評価が現れたが[53]、上記の賢治の作品に対する紹介文に左右され、初期的な作品評価は大抵「西洋文明への批判」というものだった。しかし、戦後には、作品に登場する「二人の紳士」が「すつかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかくする鉄砲をかつ」（二八頁）ぐというような軍事的な表現が問題視されるようになった。戦後ＧＨＱが占領下の日本において、メディアの事前検閲を行い、賢治作品の一部が削除命令を受けていたことが谷暎子によって報告されている（「占領下の検閲と賢治童話」『宮沢賢治研究 Annual 14』平成一六年三月）。谷の報告によると、昭和二〇年九月より開始された事前検閲で、「蟻ときのこ」（『やまなし』昭和二一年）と「北斗の北斗七星」（『注文の多い料理店』昭和二二年）が全削除、「注文の多い料理店」（同前）が部分削除となり、いずれも軍事的な表現が削除対象とされたという。このようにして、戦前・戦中の時局的な評価によって一気に名が知れ渡った宮沢賢治の作品のうち、軍事的な表現が含まれているものは戦後になって検閲の対象となったのであった。そして「注文の多い料理店」には、軍事的な表現が含まれているだけではなく、文脈からしても、帝国主義を批判するような表現があることがわかる。東京からやってきたイギリス兵風の二人の紳士が、猟に出かけるが、何も収穫がなく、案内人の「鉄砲打ち」に帰途を案内されているうちに見失って、道に迷ってしまう。二人はすっかりおなかが空いてしまい、洋風の「西洋料理店 山猫軒」に入るが、「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」（三一頁）と扉の上に書かれてある文句に誘われ、次から次へと店の扉の中に進んでいく。そうするうちに、自分たちのほうこそ注文されている側だと気づき、山猫軒の山猫に危うく食べられそうな危機一髪に陥るが、案内人が連れてきた犬に助けられる。しかし、「さつき一ぺん紙くづのやうになつた二人の顔だけは、東京へ帰つても、お湯にはいつても、もうもとのとほりになほりませんでした」（三七頁）。

「すつかりイギリスの兵隊のかたちをして」いる二人の紳士と、二人の猟を案内する「鉄砲打ち」がそれぞれ帝国主義の勢力を拡張する宗主国側と、宗主国側の人間に媚びる植民地側の現地人を表象していると見なすことが出来る。しかし「すつかりイギリスの兵隊のかたちをして」いるという描写から、二人の紳士が帝国主義の諸列強の一つであるイギリスの代表として表象されているとみなすのは、彼らがイギリス風に扮しただけの「ニセ」のイギリス人で、しかも最後に「東京に帰」ったという叙述を踏まえて考えると、やや安易な読み方であると言える。当時の中国においては、大正八（一九一九）年に起きた五四運動の啓蒙思潮のおかげで、反帝国主義の思想が高揚していた。第一次世界大戦を通して中国をめぐる帝国主義の諸列強の勢力配置に変化が起き、中国における各軍閥はそれぞれの帝国主義と結びつき、軍閥混戦は帝国主義諸列強の中国に対する半植民地的支配と深く関わっていた[54]。また、第一次世界大戦後、中

国をめぐる帝国主義の勢力関係について、副島圓照[55]は「日、米の擡頭とともに、イギリスは相対的には勢力を後退させたが、しかしその金融財政支配の面において依然として優位性を保持していた」とし、「貿易量においては香港をのぞけばすでに日本がイギリスを上回るにいたったが、大戦を通じてイギリスはその支配権を温存させた」と指摘している。こういった時代背景もあって、昭和一八年一二月に「女声」に「注文の多い料理店」が掲載された際に、イギリス兵風の風貌をしている二人の紳士やその紳士たちの猟を案内する「鉄砲打ち」の登場が、当時の中国の読者にどのように読まれていたのかが興味深い点である。

六、結論

これまで「女声」の「文芸欄」に掲載されてきた日本作家の作品と、田村俊子との接点を分析してきた。宮沢賢治「注文の多い料理店」、豊島与志雄「銀の笛と金の毛皮」「うどんと石」「太一の靴は世界一」「象のワンヤン」武者小路実篤「愛と死」火野葦平「怪談宋公館」といったこれらの作品の選定は一見、恣意的なものに見えるが、当時の中国における時代背景と一緒に合わせて考えてみると、意外な繋がりが浮かび上がるのがわかる。例えば武者小路実篤という白樺派を代表する作家、作風は、ちょうど大正八（一九一九）年に中国に起きた「五四運動」の風潮と迎合し、当時の中国知識人（五四啓蒙運動の旗手である周作人や魯迅ら）の間で最も歓迎された作家となった。五四運動の主なスローガンの一つでもあった「反帝国主義」の中では、特に反日精神が強調されていた。反日運動の一環でもあった五四運動の啓蒙活動に都合よく利用されたのは、白樺派が掲げていた、「腐敗した家庭の束縛」「狭隘な愛国心の拘束」からの自己の解放であった。武者小路実篤は、こういった反帝国思想の啓蒙思潮に不本意でありながらも、間接的にそれを手助けした一人となったのであった。そして彼の作品が小説のみならず、評論や戯曲なども全般的に中国の読者に紹介されていたことから、実篤の中国での人気ぶりが窺われる。また、「兵隊三部作」でベストセラー作家となった火野葦平の作品の「女声」での掲載は、一見日本の帝国主義の宣揚にも見えるが、掲載されたナンバーは日本の兵隊を賛美するものの中では最も美化色の薄い「怪談宋公館」であった。同じように、時局的に都合の良い宮沢賢治の作品の中では、かえって帝国主義への皮肉が込められている「注文の多い料理店」が選ばれることになった。「イギリスの兵隊のかたち」をしている二人の紳士が自分たちの傲慢によって、危うく見下していた山猫に食べられるという「帝国への批判」としても読み取れる文脈なのである。賢治作品の普及の初期段階を考えてみると、賢治の聖人化を促すような作品、例えば「雨ニモマケズ」や「グスコーブドリの伝記」「気のいい火山弾」などが意図的に紹介されていたことがわかるが、時局的にイギリス兵風に扮した二人の紳士が登場するような作品を掲載することに雑誌側の隠された意図があったかどうかはは

つきりわからないが、日本帝国主義のプロパガンダ雑誌としては、大胆な選定だったと言えよう。このように、「女声」には宗主国である日本内地の日本作家の作品が掲載されていたが、そのナンバーを見てみると、時局に迎合するものというより、かえって反戦・反日的な作品が選ばれていたことがわかる。「女声」に掲載されていたこれらの日本作家の小説は翻訳され、中国語で掲載されていたが、宮沢賢治と豊島与志雄の作品を翻訳した「緑妮」や、武者小路実篤と火野葦平の小説を翻訳した「荻崖」といった翻訳者についての情報は皆無である。「関露はまた巧妙に読者を誘導するような評論・小説・翻訳・劇評・映画評論・インタービュー記事などを、いくつかのペンネームを使ってほぼ毎号欠かさずに書いていた」[56]と岸陽子が指摘しているように、スパイ活動をしていた関露はペンネームを使って、「女声」に文章を発表したり翻訳したりして、意図的に読者に共産党的な思想を吹き込む仕事をしていたことがわかる。そして「緑妮」や「荻崖」といった翻訳者たちの名前が果たして本名だったかどうかは不明である。関露が日本語ができたかどうかもわからないし、また、どのようにして翻訳に手を加えたのかも確認できない。翻訳者や翻訳されている原文に対する情報がもっとたくさん入手できたなら、「女声」における日本人作家の作品の掲載事情の全貌がもっと明瞭に把握され得るだろう。この点を今後の課題にして検討していきたい。

※　文献などの年時表記は、日本における時代感覚の把握の上から、便宜的に元号を用いた。

【注記】

1　周龍梅「翻訳と評価[中国における]」(天沢退二郎・金子務・他編集『宮沢賢治イーハトヴ学事典』弘文堂、平成二二年一二月)

2　王向遠の整理によると、宮沢賢治の翻訳作品は、昭和三二年の『小木偶拉大提琴』以降は、『宮沢賢治童話選』(周龍梅訳、南京訳林出版社、平成六年)『宮沢賢治童話選』(藤瑞訳、光明日報出版社、平成六年)『銀河鉄道の夜(童話集)』(胡美華訳、西北大学出版社、平成六年)『宮沢賢治作品選』(王敏・他訳、春風文藝出版社、平成八年)がある(王向遠、「付録」『二十世紀中国的日本翻訳文学史』北京師範大学出版社、平成一三年三月)

3　瀬戸内寂聴「田村俊子年譜」(『瀬戸内寂聴全集』第二巻、新潮社、平成一三年三月)

4　瀬戸内寂聴「田村俊子」同前掲『瀬戸内寂聴全集』第二巻

5　岸陽子「『女声』創刊号に秘められたメッセージ」(植民地文化研究会編「植民地文化研究第六号」不二出版、平成一九年七月)

6　岸陽子「三つの『女声』」(渡辺澄子編「国文学解釈と観賞」別冊「今と云う時代の田村俊子――俊子新論」、至文堂、平成一七年七月)

7　渡辺澄子「田村俊子を読み直す」(同前掲「国文学解釈と観賞」別冊「今と云う時代の田村俊子――俊子新論」)

8　岸陽子「三つの女声」同前掲「国文学解釈と観賞」別冊「今と云う時代の田村俊子――俊子新論」

9　関口安義「十八、豊島与志雄」(日本児童文学概論編集『日本児童文学

概論』東京書籍株式会社、昭和五一年四月）

10 関口安義、同前掲『日本児童文学概論』

11 関口安義「童話」（『豊島与志雄研究』笠間書院、昭和五四年一〇月）

12 「天狗笑」は与志雄童話の最高作と言われる作品で、「赤い鳥」（大正一五年七月）に発表。

13 斉藤正直（「豊島与志雄年譜」）によると、「円本『レ・ミゼラブル』全三巻の翻訳印税はまだ十分あり、生活のため創作する必要はなく、遊んで暮らす。ただ、母を亡くした三人の子どものために、せっせと童話を書く」という（『豊島与志雄著作集』第六巻、未来社、昭和四二年一一月）

14 昭和一九年一二月、昭和二〇年一月、三月、四月

15 昭和一五年三月七日東京を出発した豊島与志雄・谷川徹三ら一行は、上海に二〇日ぐらい滞在し、残りの十日間で蘇州・鎮江・揚州・南京を巡り、最後に杭州を見、再び上海に戻ったという（関口安義「中国旅行」、同前掲『豊島与志雄研究』）

16 瀬戸内寂聴「田村俊子」同前掲『瀬戸内寂聴全集』第二巻

17 瀬戸内寂聴「田村俊子」同前掲『瀬戸内寂聴全集』第二巻

18 阿部知二「花影 田舎への手紙」（『阿部知二全集』第一三巻、河出書房新社、昭和五〇年七月）※初出昭和二四年「文学界」六月号

19 王向遠「二三十年代的日本翻訳文学」（同前掲『二十世紀中国的日本翻訳文学史』）

20 狭間直樹『京都大学人文科学研究所共同研究報告「五四運動の研究」第一函1 五四運動研究序説』同朋舎、昭和五七年三月

21 狭間直樹、同前掲『京都大学人文科学研究所共同研究報告「五四運動の研究」第一函1 五四運動研究序説』

22 斎藤道彦「五四時期の思想状況」（野沢豊・田中正俊ら編集『講座中国近現代史 第四巻』東京大学出版会、昭和五三年七月）

23 斎藤道彦、同前掲「五四時期の思想状況」

24 魯迅訳の『或る青年の夢』の連載は、当局によって途中禁止され、連載も翻訳も余儀なく中断されたが、その連載を同年一一月に雑誌「新青年」で再開し、四期を分けて掲載した（王向遠「二三十年代的日本翻訳文学」同前掲『二十世紀中国的日本翻訳文学史』）

25 王向遠「二三十年代的日本翻訳文学」（同前掲『二十世紀中国的日本翻訳文学史』）

26 徐祖正訳の戯曲集『四人及其他』には、「四人」「ある家庭」「「嬰児殺戮」中の一小出来事」「養父」といった五つの戯曲が収録されている（王向遠「二三十年代的日本翻訳文学」同前掲『二十世紀中国的日本翻訳文学史』）

27 板垣直子「戦争文学」（『事変下の文学』第一書房、昭和一六年五月）

28 井伏鱒二「解説」（『火野葦平選集第二巻』東京創元社、昭和三三年一一月）

29 葦平と河伯洞の会編集『火野葦平Ⅲ 僕のアルバム』（花書院、平成二一年四月）

30 昭和三二年八月六日から同月一三日までＮＨＫで放送されていた（「テレビドラマデータベース」http://www.tvdrama-db.com/ 閲覧日平成二四年八月）

31 井伏鱒二「解説」同前掲『火野葦平選集第二巻』

32 井伏鱒二「解説」同前掲『火野葦平選集第二巻』

33 王向遠「戦争時期の日本翻訳文学」（同前掲『二十世紀中国的日本翻訳文学史』）

34 「麦と兵隊」は昭和一三年「改造」八月号に発表され、同月改造社より単行本が出版された（「年譜」、同前掲『火野葦平選集第二巻』）

35 王向遠「戦争時期の日本翻訳文学」（同前掲『二十世紀中国的日本翻訳文学史』）

36 「草野心平略年譜」（深澤忠孝『草野心平研究序説』教育出版センター、昭和五九年四月）

37 深澤忠孝「異国の青春」前掲『草野心平研究序説』

38 深澤忠孝「もう一人の兄」前掲『草野心平研究序説』

39 深澤忠孝「異国の青春」前掲『草野心平研究序説』

40 深澤忠孝「もう一人の兄」前掲『草野心平研究序説』

41 森惣一は賢治が生前、実際に交流があった数少ない文人の一人であった。今日の宮沢賢治像を創った人達の一人として、米村みゆきは森の名前も挙げている。森は、大正九年六月から昭和一五年六月まで岩手日報社に勤務し、昭和六年年五月に学芸部長に着任し、学芸欄の紙面を自由に操ることのできた男であった（米村みゆき「盛岡発・偉人のプロデュース」『宮沢賢治を創った男たち』青弓社、平成一五年年一二月）

42 資料は「『宮沢賢治全集』別巻／年譜」（続橋達雄編『宮澤賢治研究資料集成』第三巻、日本図書センター、平成二年六月）によって作成した。

43 米村みゆき「盛岡発・偉人のプロデュース」同前掲『宮沢賢治を創った男たち』

44 賢治全集の刊行が計画された際、その販売促進のための宣伝・広報機関として「宮沢賢治友の会」が発足された（宮沢賢治没後七十年「修羅はよみがえった」刊行編集委員会編集「昭和九年 在京「宮沢賢治友の会」の果たした役割」『修羅はよみがえった：宮沢賢治没後七十年の展開』宮沢賢治記念会、平成一九年九月）

45 昭和一六年一二月、いろいろな児童文化団体が統合されて少国民文化協会が結成された。そして児童文学を少国民文学と呼称することが要求された。軍国主義国家に忠誠な国民たるべき少国民の文学という概念である。（日本児童文学概論編集「児童文学の研究と批評」『日本児童文学概論』東京書籍株式会社、昭和五一年四月）

46 米村みゆき「Making of 風の又三郎」（同前掲『宮沢賢治を創った男たち』）

47 宮沢賢治の原作にはないが、日活『風の又三郎』で付け加えられた「学校の要素」としては、次の四つがあげられる。1、冒頭で二人の児童が国旗に敬礼して学校の建物に入る。2、授業の場面で、実際の国定国語教科書の本文が引用される。3、学校の場面で、ラッパが鳴り響くなか、国旗がクローズアップされる。4、末尾で学校の建物と国旗が焦点化される。（米村みゆき「Making of 風の又三郎」、同前掲『宮沢賢治を創った男たち』）

48 森三紗「昭和二十年までの賢治評価――「岩手日報」を中心として」（同前掲『修羅はよみがえった：宮沢賢治没後七十年の展開』）

49 「『宮沢賢治全集』別巻／年譜」（続橋達雄編、同前掲『宮澤賢治研究資料集成』第三巻）

50 周龍梅「翻訳と評価［中国における］」（同前掲『宮沢賢治イーハトヴ学事典』）

51 牛山恵「宮沢賢治童話の教材史――文学作品と小学校「国語」教科書との関連――」（「国語教科書研究の方法――国語教材の変遷を考える――」全国大学国語教育学会、平成二四年二月）

52 『注文の多い料理店』校異、三八九頁（『校本 宮沢賢治全集 第一一巻』筑摩書房、昭和四九年九月）なお、本稿での「注文の多い料理店」の本文引用はすべて『校本 宮沢賢治全集 第一一巻』に拠る。

53 平沢信一「注文の多い料理店」（「国文学 解釈と教材の研究」「宮沢賢治の全童話を読む」第四八巻第三号臨時号、平成一五年二月）

54 副島圓照「帝国主義の中国財政支配――一九一〇年代の関税問題――」前掲『講座中国近現代史 第四巻』

55 副島圓照、同前掲「帝国主義の中国財政支配――一九一〇年代の関税問題――」

56 岸陽子「三つの女声」同前掲「国文学解釈と観賞」別冊「今と云う時代の田村俊子――俊子新論」

（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程二年）